

み仏のほほえみに

■ 楽曲データ

歌詞：山崎澗朗 作詞

楽曲：大栗裕 作曲

発表：学校連合会 1969年

初演：「龍谷大学混声合唱団第24回定期演奏会」 1969年12月4日

初出：—

管理番号：M1891

■ 創作の経緯

学校連合会（現・龍谷総合学園）で制作した楽曲で、原曲は女声二部合唱。初演は、増山顕珠（元京都女子大学・龍谷大学学長、1969年没）の追悼として、《私の中に》《いのちはほろびない》とともに行われた。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第5巻収録

底資料：『み仏のほ、えみに』 手書き印刷譜

比較資料：作曲者自筆譜

校訂の詳細：特になし

■ 解説

《み仏のほほえみに》は、日常生活の光景を描きながら、わかりやすい言葉で、いかに仏教のみ教を伝えていくか、といった課題のなかから生まれた仏教讃歌です。

◆ 作詞者について

作詞の山崎澗朗（1941～）は兵庫県生まれ、龍谷大学を卒業後、京都女子高校教諭・京都女子大学講師を経て、兵庫教区出石組正福寺住職を務めました。龍谷大学在学中、同大学男声合唱団に所属したことが縁となって、仏教讃歌の作詞を手がけるようになりました。主な作品に、男声合唱組曲《観音》（多田武彦作曲）、《いつか私は》（大谷千正作曲）、龍谷総合学園オリジナルソング《空へ海へ》（三浦明利作曲）などがあります。

◆ 作曲者について

作曲は、大栗裕（1918～1982）。大阪の船場（大阪町人文化の中心地）に生まれ、オーケストラのホルン奏者として活躍しましたが、独学だった作曲の分野でオペラ《赤い陣羽織》や管弦楽曲《大阪俗謡による幻想曲》（ともに1955

年作曲)が高く評価され、作曲活動に専念するようになりました。作品の持つ強い民族性から「東洋のバルトーク」と呼ばれ、管弦楽やオペラのほか、吹奏楽・合唱・邦楽と幅広いジャンルを手がけたほか、マンドリン・オーケストラの顧問を務めていたことから、マンドリン・オーケストラ用の楽曲も多く遺しています。

◆詞について

詞はやや変則的な定型詩ですが、作曲者は歌詞を反復することで曲の形式を整えました。

阿弥陀さまのあたたかいほほえみに接すると、日頃の生活のなかでせかせかと動き、自らを振り返る暇もなく過ごしている私の姿が明らかになってきます。そして、それ故に私たちを包み込んでくださる阿弥陀さまの大慈大悲の眼差しは、真の喜びと安らぎを与えてくださいます。

仏さまのほほえみに接し、幼い頃の野遊びや、母の胸に抱かれて聴いた歌を思い起こす。誰の心にも宿るであろう懐かしい思い出に、作詞者は、阿弥陀さまの呼び声を織り込んでいるように受けとれます。

◆曲について

メロディーには、8分休符が多用されています。小節の1拍目に休符が続くため、歌いにくさも少し感じられるかもしれませんが、この8分休符によって、言葉がはっきりするように書かれています。

◆歌い方について

- ①曲の前半は、休符のたびに大きな息継ぎをすると、音楽がスムーズに流れません。特に6・10小節目は、言葉を区切る程度に考えてください。
- ②8小節目の2分音符と8分音符がタイで結ばれている音は、必要以上に長くならないよう注意してください。そして、9小節目からのフレーズがタイミングよく出られるようにしましょう。
- ③12小節目4拍目からは、メロディーが伸びやかになります。おおらかな、のびのびとした声で歌ってください。
- ④14小節目は、付点2分音符が長過ぎないように、そして4拍目裏の8分音符が短くならないように気を付けてください。
- ⑤18小節目は、「ファ」→「レ」の跳躍をスムーズに。
- ⑥二部合唱で歌うときは、三度での動きが多いので、ハーモニーをしっかりと確認しましょう。7小節目は、アルトの動きをしっかりと聴かせて。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 55（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第182号収録）を加筆・修正のうえ、転載。